

乳幼児を持つ母親における子どもの運動遊びに関する 危険認識についての一考察

古 屋 朝映子*

A Study of the Risk Perception of the Child's Movement Play in Mothers with Infants

Saeko FURUYA

要 旨

本研究では、子どもの運動遊び場面における母親の危険認識の実態を明らかにすることを目的とし、乳幼児を持つ母親を対象に、フォーカス・グループインタビュー調査を実施した。その結果、子どもの運動遊びで危険だと感じる場面については【異年齢交流】・【室内での運動遊び】・【屋外での運動遊び】の3つが挙げられ、そのそれぞれにおいて危険だと感じる直接の事象（原因）と、その事象に影響を及ぼした事柄（要因）に分類された。また、子どもの運動遊び場面での危険の捉え方に関しては、【実践からの学びの必要性】・【保護者の認識】の2つのカテゴリーに集約された。子どもの安全な運動遊び環境の構築のためには、遊具の安全管理や遊び場のサーフェスの工夫等、物理的な安全確保に加え、保護者の適切な支援という人的環境を整えることが必要不可欠であると考えられる。

キーワード：乳幼児教育／保育，母親，運動遊び，危険認識

I. 問題と目的

現代の子どもを取り巻く環境の変化に伴い、子どもの運動遊びの重要性が再認識されている。文部科学省が策定した幼児期運動指針（文部科学省，2012）では、「友達と一緒に楽しく遊ぶ中で多様な動きを経験できるよう、幼児が自発的に体を動かしたくなる環境の構成を工夫すること」の必要性が述べられ、様々な取り組みがなされている（例えば、スポーツ庁、

*講師 コーチング学・体操コーチング論

2016)。一方で、公園の遊具撤去問題のように、危険であるという理由から、運動遊びの内容を制限してしまう現状もある。

心身の発育発達途中である子どもの運動遊びに対しては、安全への配慮が必要不可欠であり、子どもが安全に、かつ多様な運動遊びの機会を得るためには、運動遊びに対して適切な支援・援助をおこなう必要がある。しかし、必要以上の活動制限は、多様な運動遊びの機会を奪うというジレンマを孕んでいる。

子どもの運動遊びへの取り組み方には、保護者の意識が大きな影響を与えている。このことについて Fredericks & Eccles (2005) は、子どもの運動参加には、保護者が持つ価値や期待が関係しているというモデルを提示している。さらに幼児期は、児童期以降に比べ保護者の影響が大きい時期であるため、保護者の運動に対する考え方により、子どもの運動経験も大きく異なってくる可能性があると言われている (吉田, 2014)。

筆者が日々の運動指導現場において、保護者からの話を見聞きすると、前述の「保護者の価値」は、単に運動遊びの重要性に対する認識だけではなく、運動遊びに対する危険認識も大きく関係しているという印象が大きい。本研究では、幼児期の子どもにとって一番影響を与えうる保護者である母親を対象に、フォーカス・グループインタビュー調査実施し、子どもの運動遊び場面における危険認識の実態を定性的に明らかにすることを、研究の目的とした。本研究を、子どもの運動遊び環境の構築に必要な、保護者への適切な支援方法のあり方を考える一助としたい。

なお、本研究においては、運動遊びを「子どもが日常生活の中でダイナミックに身体を動かす活動すべて」と操作的に定義した上で研究を進めることとした。

Ⅱ. 方 法

1. 調査日

2013年6月

2. 対象者

対象者は、茨城県 T 市に在住の、0歳～8歳の子どもの持つ母親5名とした。対象者の選定にあたっては、茨城県 T 市で活動する子育て支援の NPO 法人に本研究の趣旨を説明し、協力を依頼した。NPO 法人からの紹介を受けた後、研究の趣旨を説明し、承諾を得られた者を対象者とした。

3. データ収集の方法

データの収集には、フォーカス・グループインタビューを用いた。フォーカス・グループインタビューは、グループダイナミクスを活用することで、調査者と当事者の1対1の面接では得られにくい力動的な当事者間のやり取りから、より自然体に近い方法で醸し出された情報を把握できる方法（安梅，2001）であり、当事者のニーズや意見を明らかにするという、本研究のテーマに適している方法であると考え、採用した。

調査は、研究協力を依頼したNPO法人のオフィス内のプレイルームにて実施した。

インタビュー内容は、対象者の同意を得た上で、ICレコーダーに録音した。録音された音声記録を文字に起こし、逐語録を作成した。音声記録に残せない非言語的観察項目（表情・態度・視線など）は、インタビュー終了直後に、調査者である筆者が想起し記録した。インタビュー時間は、約1時間とし、対象者の話しやすい雰囲気づくりのためお茶を用意するなどの工夫をした（柴辻，2003）。

また、インタビュー終了後に質問紙にて、基本的属性として、対象者の年齢および子どもの年齢と性別について尋ねた。

4. 調査内容

下記の2つの質問についてインタビューガイドを作成し、調査を実施した。

- 問1：子どもの運動遊び場面で危険だと感じる場面とその要因について
- 問2：子どもの運動遊び場面での危険の捉え方について

5. データ分析の方法

本研究は、対象者の意見の把握という仮説生成的研究であるため、データ分析の方法には、定性的な研究方法を選択した。

具体的には、音声記録から作成した逐語録をデータとし、大谷（2011）が開発したSCAT（4ステップコーディングによる質的データ分析法：Step for Coding and Theorization）を用いて分析した。SCATは、小規模の質的データの分析に有効であり、手続きが明確で分析の過程が明示的に記述されるという特徴を持つ方法である。具体的な手順としては、マトリクスの中に発話単位にセグメント化したデータ（テキスト）を記述し、そのそれぞれに、①テキストの中の注目すべき語句、②テキスト中の語句の言い換え、③それを説明するようなテキスト外の語句、④そこから浮き上がるテーマ・構成概念の順にコーディングをおこなった。本研究では、④のテーマ・構成概念について、意味内容の同質性と異質性を比較しながら類型化し、カテゴリーを抽出した。

SCATによる分析は、分析過程が明示的に記述されるため、研究の信憑性と確証性を得るの

表 1 SCAT による分析の一例

発話者	テキスト	〈1〉 テキスト中の注目すべき語句	〈2〉 テキスト中の語句の言い換え	〈3〉 左を説明するようなテキスト外 の概念	〈4〉 ナマ・構成概念 (前後や全体の文脈を考慮して)
A さん	昨日なんですけど、公園とか行くといろんな年代の子がいて、いろんな年代の子だとおおきなお兄ちゃんはできることをやるじゃないですか。だから、滑り台だったら頭からすべってみたり。だけど、それを自分がすべれると、できると思っちゃうんですね。お兄ちゃんだったら、頭からすべったら、手を出すこともできるけど、自分は出せないのに、おんなじくやろうとして、すごく危ないということはよくあります。	いろんな年代の子がいて自分がすべれると、できると思っちゃうんですね。自分は出せないのに、おんなじくやろうとして、すごく危ない	異年齢、できないのにやろうとすること	異年齢交流、年長児の行動、運動能力の過大評価、憧れ	異年齢交流(場面)、年長児の模倣(場面)、運動能力の過大評価(要因)、年長児への憧れ(要因)
B さん	だから、その、楽しいんだけど怪我してからでは、癖になってからでは遅いじゃないですか。治る怪我だったら良いんだけど、治りづらくなる怪我もあるから、そういうのはちょっと困るなって思ったりすることはありましたね。確かに経験はしてほしいんだけど、なんかその限度が難しいなあって思ったりします。	楽しいんだけど怪我してからでは、癖になってからでは遅い。経験はしてほしいんだけど、なんかその限度が難しい	治る怪我と治らない怪我、危険体験の必要性、見極めの難しさ	幼児期の危険体験の必要性、見極めの難しさ	「安全に」危険を体験することの必要性、安全と危険の「見極め」の難しさ

に優れた方法であると言える。本研究では、データの信用性を担保するために、筆者を含む体操および幼児体育を専門とした研究者3名の間で、メンバーチェック(麻原, 2009)をおこない、データから逸脱した解釈や分析にならないよう配慮した。

7. 倫理的配慮

対象者には、文書と口頭にて研究の趣旨を詳細に説明し、文書による同意を得た上で研究を実施した。また、同意後においても同意を撤回できることや、得られたデータを個人のプライバシーが特定できない形で処理する旨、本研究以外には使用しない旨を説明した。

Ⅲ. 結果と考察

本研究の対象者は、0歳～8歳の子どものを持つ母親5名であった。対象者の属性は表2の通りである。

以下、問いごとに、抽出されたそれぞれの構成概念について実際の語りを呈示しつつ、考察をおこなう。なお、実際の語りの呈示には、対象者の語りの言葉をそのまま引用した部分と、筆者が解説する部分とを交互に重ねて呈示する方法である二重奏形式（小林，2000）を採用した。「 」内の文章は対象者の実際の語りであり、それ以外は筆者が解説した部分である。

1. 問1：子どもの運動遊び場面で危険だと感じる場面とその要因について

子どもの運動遊び場面で危険だと感じる場面とその要因については、9事例を収集した。SCATのテーマ・構成概念から抽出したカテゴリーを図1に示した。サンプリング時には、子どもの運動遊び場面で危険だと感じる「場面」とその「要因」という2つのフェーズを想定していたが、分析の結果、挙げられたそれぞれの「場面」において、危険だと感じる直接の事象（原因）と、その事象に影響を及ぼした事柄（要因）に分類できることが明らかとなった。よって、各カテゴリーを、場面カテゴリー・原因カテゴリー・要因カテゴリーの3つに分けて示すこととした。

子どもの運動遊び場面で危険だと感じる場面（場面カテゴリー）については、【異年齢交流】・【室内での運動遊び】・【屋外での運動遊び】の3つのカテゴリーに分類された。また、要因カテゴリーを同一要素ごとに集約させると、個人内の要因に起因する事項（[運動能力の過大評価]・[自己抑制能力の未発達]・[不注意]）、他者の影響に起因する事項（[年長児への憧れ]・[テレビアニメの影響]・[子ども同士のじゃれ合い]）、保護者の対応に起因する事項（[年長児の保護者の対応方法]・[「無理矢理」な補助]）、活動する環境に起因する事項（[住宅の狭小性]・[サーフェスの環境]）の4つに大別できた。

表2 対象者の属性

No	年齢	第1子の年齢	第2子の年齢	第3子の年齢
1	29歳	1歳（男）	5ヶ月（男）	—
2	38歳	8歳（男）	6歳（女）	—
3	33歳	3歳（男）	1歳（女）	1歳（女）
4	29歳	3歳（男）	1歳（男）	—
5	38歳	3歳（男）	1歳（男）	—

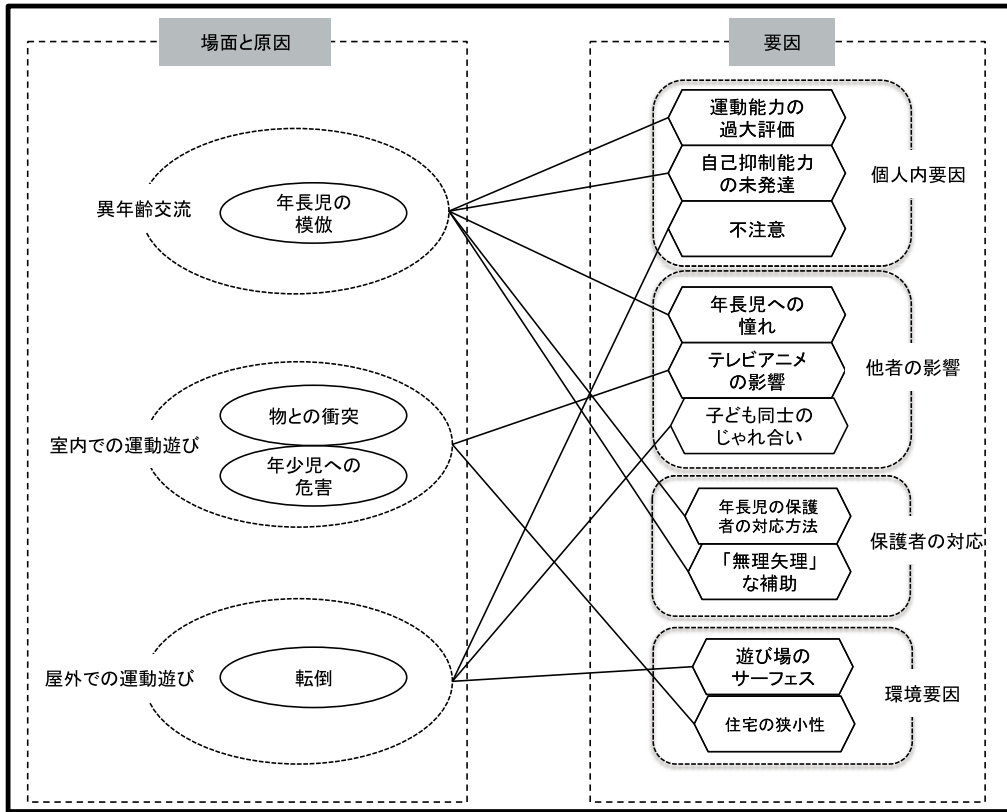


図1 問1の概念化

以下に、各場面カテゴリーにおける分析結果を述べる。なお、場面カテゴリーは【 】、原因カテゴリーは〈 〉、要因カテゴリーは[]で示す。

1-1. 【異年齢交流】

様々な年齢の子どもが集う【異年齢交流】の場面で危険が生じる原因（原因カテゴリー）としては、年少児が〈年長児の模倣〉をすることが挙げられた。

（〈年長児の模倣〉についての主な語り）

公園に行くと色々な年代の子どもがいて、「いろんな年代の子だとおおきなお兄ちゃんはできることをやるじゃないですか。（中略）自分はできないのに、おんなじくやろうとして、すごく危ないということはよくあります」。

〈年長児の模倣〉に影響を及ぼす要因（要因カテゴリー）には、一緒に遊んでいる年長児の

姿に憧れを抱き（〔年長児への憧れ〕）、「自分もできる」と、実際の運動能力以上のことをやろうとしてしまうこと（〔運動能力の過大評価〕）、また、そのことについて保護者から「危ないからやめなさい」と静止されたにもかかわらず、おこなってしまうこと（〔自己抑制能力の未発達〕）が挙げられた。また、年長児の保護者が、年少児が真似をしてしまう危険性があるにも関わらず、年長児の危険行為を容認してしまうこと（〔年長児の保護者の対応方法〕）、年少児の保護者が、危険な状況に陥りそうになった我が子の補助方法が分からない（〔「無理矢理」な補助〕）という、保護者側の問題点も挙げられた。

（〔年長児の保護者の対応方法〕についての主な語り）

（滑り台の）背中滑りで頭から大きい子どもが滑っているのを見て、自分もできると思ってしまう。「もし首とかやっちゃったら（怪我をしてしまったら）“ながらくかかってしまう”し、首だとすごく危険性も高いから、やらないでほしいけど」、年長児の保護者も大きい子どもだったら大丈夫だと思うのか静止しないため、我が子は自分がなぜ静止させられるのか分からない。

（〔「無理矢理」な補助〕についての主な語り）

滑り台を滑る際に、毎回無理矢理姿勢を直して滑らせている。「それが（安全な姿勢）ができないんだったら、他ので遊んで！」と言うが、上手に滑ることができず、無理矢理に滑らせてしまっているため、逆に危険なことがある。

これらの語りでは、いずれも公園での滑り台遊び場面における問題点が語られていた。様々な年齢の子どもが集う公園は、異年齢交流がおこなわれる場でもある。異年齢交流は、子どもの社会性を育む上で必要なことであることは自明の理である。しかし、子どもの運動能力の発達は年齢による差が大きく、また同じ年齢でも個人差が大きい。また、本事例で挙げられた滑り台での遊びの場合、年齢に応じて、単に滑る機能を学習する“機能的段階”、より早くスリリングにという技術開発をする“技術的段階”、集団遊びゲームをする“社会的段階”（仙田、2003）というように、遊びの発達段階により、遊び方が異なってくる。このことに加え、幼児期の子どもの場合、自身の能力を過大評価してしまう傾向があり（金城、1991）、実際の運動能力以上の行為をおこなってしまう可能性がある。以上の要因が重なることで、異年齢交流時における遊びにおいては、危険が生じやすいと言えよう。

特に低月齢の幼児がいる異年齢交流場面の場合、危険回避のためには大人による援助が必要であり、公園等の指導者がいない公共施設において、その役割を担うのは保護者である。「無理矢理」な補助で説明されたように、危険な状態に陥った子どもへの援助方法が分からないといった声も聞かれたことから、保護者への事故防止指導の一つとして、危険な状態に陥った子どもへの援助方法を指導する必要性が示唆される。

1-2. 【室内での運動遊び】

【室内での運動遊び】場面において危険が生じる原因（原因カテゴリー）は、自宅内の家具等におつかることで、運動遊びの主体児が危険な目にあう〈物との衝突〉と、主体児が狭い室内で動き回ることによって、妹や弟といった年少児に危険が及ぶ〈年少児への危害〉が原因であることが挙げられた。また、その要因は、[住宅の狭小性]と、いわゆる「戦隊もの」と言われている「[テレビアニメの影響]」であった。

（[住宅の狭小性] についての主な語り）

家が狭いので、その中で激しく遊ぶのが危ない。「とび跳ねる、くると回る、ぶん投げる。すぐソファがあつたり、サークルみたいなのがあつたり、扉がある、窓がある・・・なので正直、ずっと危ないと思います」。

社会環境の変化に伴い、屋外における遊びの「間」の減少や安全上の理由等から、屋外での遊びが制限されつつある現代において、室内で遊ぶ時間は増加傾向にある。また、特に都市部においては本研究の語りにもあるように、自宅内で十分に身体を動かすスペースがないという住宅の狭小性等の事情もある。子どもの成長にとって、ダイナミックな身体活動は必要不可欠であるため、現代の社会状況を鑑みた上で、子どもが十分に身体を動かせるスペースの確保が求められる。

1-3. 【屋外での運動遊び】

【屋外での運動遊び】場面における危険は、〈転倒〉が原因であることが挙げられた。その要因は、子どもが一人で遊んでいる際に、不注意により転倒してしまう要因（[不注意]）、同年齢の子どもが複数人で遊んでいる際に、誤って相手を押し倒してしまう要因（[子ども同士のじゃれ合い]）、遊んでいる場所の地面が、凸凹が多い環境であつたり、固いコンクリートであつたりと、怪我を誘発しかねない環境であること（[遊び場のサーフェス]）の3つが挙げられた。

（[不注意] についての主な語り）

「転んだ先が断崖絶壁や水たまりなことがよくあるんですね。緑は大事ですけど、木の根っこはちょっと怖いって... 尖った枝とかがもしあつたらと思うと、『ああっ!』ってなります。」

（[子ども同士のじゃれ合い]・[遊び場のサーフェス] についての主な語り）

体格の大きな友だちとじゃれ合って遊んでいるうちに、一緒に倒れてしまい、石畳に頭を打ってしまった。「下がまだ土だったらよかつたかな、って... 石畳とか公園だと下（地面）が危ない」。

子どもは大人と比較して、重心が高い、視野が狭い、興味の対象に関心が集中してしまいや

表3 問2の概念化

メインカテゴリー	サブカテゴリー
実践からの学びの必要性	「ある程度」の怪我の必要性 「安全に」危険を体験する必要性 痛みを分かる必要性
保護者の認識	保護者による適切な援助の必要性 援助方法の知識不足 「安全認識」のズレ 安全と危険の「見極め」の難しさ

すい、危険予知能力が未発達である等の理由により、転倒した際に、頭部を打つことが多い（独立行政法人国民生活センター，1997）と言われている。上記は、子どもの不注意や子ども同士のじゃれ合いによるアクシデントに加えて、両者ともに遊んでいる遊び場のサーフェスの状況によって、危険が誘発されたケースであった。

2. 問2：子どもの運動遊び場面での「危険」の捉え方について

子どもの運動遊び場面での「危険」の捉え方に関する語りについて、SCATの分析方法に従いコーディングしたテーマ・構成概念から、カテゴリーを抽出した。語りの内容は、7つのカテゴリーに分類することができた（サブカテゴリー）。さらにサブカテゴリーを、意味内容の同質性と異質性を比較しながら類型化したところ、2つの大きなカテゴリーに集約することができた（メインカテゴリー）。

子どもの運動遊び場面での危険の捉え方についての語りからは、【実践からの学びの必要性】・【保護者の認識】の2つのメインカテゴリーが創出された。以下、各メインカテゴリーにおける分析結果を述べる。なお、メインカテゴリーは【 】、サブカテゴリーは〈 〉で示す。

2-1. 【実践からの学びの必要性】

メインカテゴリー【実践からの学びの必要性】は、具体的には、〈「ある程度」の怪我の必要性〉・〈「安全に」危険を体験する必要性〉・〈痛みを分かる必要性〉の3つのサブカテゴリーから構成された。

（〈「ある程度」の怪我の必要性〉についての主な語り）

子どもが産まれた時には、怪我をさせないように育てようと思っていたが、「いざ大きくなってくると、ある程度の怪我は絶対必要」と感じるようになった。

(「安全に」危険を体験する必要性)についての主な語り)

「前回はこうやるんだよとか、この狭さじゃできないよ、と言っても分からないから、やってみて、ちょっとその辺にぶつけちゃって、『ほらできなかったでしょ』という風に覚えていく」必要もあると思う。

(〈痛みを分かる必要性)についての主な語り)

痛みを分かっていると、成長してから子ども同士で喧嘩になった際に困るため、「ここをやられたら痛いんだとか、こういう風にやったら怪我になるんだっていうのを分かしてほしい」。

これらの語りにも共通するのは、今後に影響を及ぼすような重大な怪我はしてほしくないが、実際に小さな怪我や痛みを体験することは、子どもが成長する上で必要であるという考えである。子どもの危険予知・危険回避能力は、日常生活の中で様々な体験をすることにより、少しずつ身に付くものであり、子どもにとって一番危険なのは、危険であることを認識できないこと、また危険に遭遇した時にそれを回避できないことであるとも言える。その点において本研究の対象者は、実体験による安全教育の必要性を認識していたことが明らかとなった。

2-2. 【保護者の認識】

メインカテゴリー【保護者の認識】は、具体的には、〈保護者による適切な援助の必要性〉・〈援助方法の知識不足〉・〈安全認識〉のズレ)・〈安全と危険の「見極め」の難しさ〉の4つのサブカテゴリーから構成された。

(〈保護者による適切な援助の必要性)についての主な語り)

ある程度の怪我は必要であるが、「深刻化しない程度に親が見ていてあげることが必要な」と思う。

(〈援助方法の知識不足)についての主な語り)

倒立をやりたがるけれど、「その時にどういう風に補助すればいいんだろう」。やらせてあげたいけれど、「自分もどうしていいか分からないから、ちょっとやらないでほしい」と思うこともある。

(〈「安全認識」のズレ)についての主な語り)

「夫はわりと乱暴に遊んでいるイメージがあって」(中略)あまりやりすぎないで欲しい。

(〈安全と危険の「見極め」の難しさ)についての主な語り)

治る怪我ならばいいが、治りづらくなる怪我は困ると思う。「確かに(色々な動きを)経験はしてほしいんだけど、なんかその限度が難しいな」と思う。

上記の語りから、子どもの運動遊び場面において、保護者が適切に援助をすることの必要性があると認識している一方で、子どもへの具体的な援助の方法が分からない場合があることが明らかとなった。このことは、特に屋外の固定遊具を使ったダイナミックな遊びや、室内での「倒立」等のアクロバティックな動きを含む遊びに関する事柄として語られており、子どもの

運動遊び場面において、具体的にどのように援助したらよいか分からないという〈援助方法の知識不足〉が、どこまでが安全で、どこからが危険かという〈安全と危険の「見極め」の難しさ〉につながり、「ちょっとやらないでほしい」というネガティブな感情を引き出していると推察される。

また、〈「安全認識」のズレ〉については、前述のように、「やり過ぎないでほしい」という意見の一方で、「おじいちゃんおばあちゃんは止めちゃうんだけど、とりあえず、ある程度は放っておきたい」という子ども運動遊びへの過度な制限に反対する意見も語られていた。

本研究の結果においては、保護者の援助が適切になされない原因として、子どもの運動遊び、特に倒立や前転、木登り、滑り台といった全身をダイナミックに使う活動をおこなう際にどのように援助したらいいか分からない場合（〈援助方法の知識不足〉）と、父親と母親とで安全への認識に相違が見られる場合（〈「安全認識」のズレ〉）の2つが挙げられており、それにより、子どもの活動内容や活動方法について、どこまでが安全で、どこからが危険なのかの「見極め」が困難となっている現状が明らかとなった。

IV. まとめ

本研究では、母親を対象としたフォーカス・グループインタビュー調査より、母親が持つ子どもの運動遊び場面における危険認識の実態について定性的に明らかにすることを、研究の目的とした。その結果、問1の「子どもの運動遊び場面で危険だと感じる場面とその要因」については、9事例が収集され、【異年齢交流】・【室内での運動遊び】・【屋外での運動遊び】の3つの場面にに対し、4つの危険だと感じる直接の事象（原因カテゴリー）、10の事象に影響を及ぼした事柄（要因カテゴリー）が創出された。また、問2の「子どもの運動遊び場面での危険の捉え方について」については、7つのサブカテゴリーに分類された後、【実践からの学びの必要性】・【保護者の認識】の2つのメインカテゴリーに集約された。

本研究は、母親が持つ、子どもの運動遊び場面における危険認識の実態を調査した研究であるが、それは、子どもの運動遊びにおける「危険」とどのように向き合うかについての示唆をもたらすものであった。運動遊びの活動に伴う「リスク」をすべて排除すること、すなわち危険を伴う可能性のある行為をすべて排除すること（リスク回避）は不可能であり、子どもの運動遊びの環境を奪う結果にもつながる。それよりも、積極的にリスクを予防・軽減すること（リスク除去）が重要であり、そのためには、遊具の安全管理や遊び場のサーフェスの工夫等、物理的な安全確保に加え、保護者の適切な支援による人的環境を整えることが、必要不可欠で

古 屋 朝 映 子

あるといえよう。

謝 辞

本研究において、快く調査にご協力いただきました対象者の方に、心より感謝いたします。

引 用 文 献

- 安梅勅江 (2001). ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法—科学的根拠に基づく質的研究法の展開—. 医歯薬出版株式会社：東京, 1-9.
- 麻原きよみ (2009). 質的研究法を用いた学位论文審査のためのガイドライン. 看護研究 42(5) : 341-346.
- 独立行政法人国民生活センター (1997). 小児の頭部外傷の実態とその予防対策. http://www.kokusen.go.jp/news/data/a_W_NEWS_066.html (2016年10月28日取得)
- Jennifer A. Fredricks and Jacquelynn S. Eccles. (2005) Family Socialization, Gender, and Sport Motivation and Involvement. *Journal of Exercise Psychology*, 27: 3-31.
- 金城洋子・前原武子 (1991). 幼児における自己能力評価認知能力および教師評定との関係. 教育心理学研究, 39(4), 400-408.
- 小林多寿子 (2000). 二人のオーサー. 好井裕明・桜井厚編 フィールドワークの経験. せりか書房：東京, 101-114.
- 文部科学省 (2012). 幼児期運動指針
- 大谷尚 (2011). SCAT: Steps for coding and Theorization : 明示の手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法. 感性工学, 10(3) : 155-160.
- 仙田満 (2003). 子どもの遊び空間. 子どもと発育発達, 1, 148-152.
- 柴辻里香 (2003). ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法Ⅱ—科学的根拠に基づく質的研究法の展開—/活用事例編. 安梅勅江編著 医歯薬出版株式会社：東京, 38.
- スポーツ庁 (2016). 幼児期の運動に関する指導参考資料ガイドブック第二集. 平成27年度幼児期の運動に関する指導参考資料作成委員会：東京.
- 吉田伊津美 (2014). 子どもの身体活動と保育. 白梅学園大学子ども学研究所「子ども学」編集委員会編 子ども学. 萌文書林：東京, 150.